■「ちくま評論入門」解説――読解問題への過程

18　芹沢俊介「イノセンス」

●参考　芹沢俊介『子どもたちはなぜ暴力に走るのか』【367/S18/1】（北野高校図書館）

■「ちくま評論入門」解説――読解問題への過程

■目標　独自に定義された用語を正確に理解する。

■追跡

①　イノセンスとは自分の生は自分が選んだものでないという受動性（＝根源的受動性）のことである。したがってイノセンスとは自分が直面する現実に責任をとれない、あるいは責任がないという態度となってしばしば出現する。こういう態度には年齢は関係はない、つまり大人も子どももない。誰でもが手に負えない現実に直面すれば、イノセンスという心的場所へと向かう傾斜をもっている。

ここで最重要キーワード、ほとんどテーマといっていい「イノセント」の意味を確実に捉えることが、すべてを決める。

innocent　という英単語（形容詞）には、「無罪の、潔白な、汚れのない、純潔な、無邪気な、純真な、あどけない、お人よしの、単純な」といった訳語が並んでいる。しかし、「自分の生は innocent だ」を「自分の生は無罪だ」と直訳しても、ぴんと来ない。

無罪、純真、あどけない、といった訳語からわかるのは、〈子ども〉のイメージだ。「自分が選んだものでないという受動性」「この現実に責任をとれない」。

自分がこのような、性、からだ、名前を持ち、この時代に、この親のもとで生を受けたということは、自分で選んだものではない。

子ども側が、親に向かって、「なんで、こんなふうに生んだんだよ」と迫ったとしても、親の方も、どうにもならない。「イノセンスという心的場所」とは、「わたしには責任はない！といいたくなる思い」である。このとき、「自分が選んだんじゃない」と「自分には責任はない」はセットであることに注意。

親に「なんで生んだんだよ」っていったこと、ありますか。これは、いうほうにとっても、いわれたほうにとっても、悲痛なことばだ。もっと残酷なのは、「なんで生まれてきたんだ」ということば。こういうコトバは、もはやことばというに値しない。暴力である。親であろうが子であろうが、このような、生の根源を傷つけるような暴力を振るう権利はない。

②　わが子を虐待している若い親たちの手記などを読むと、暴力をふるってもそのことのつらさは感じても相手のわが子への心の痛みは感じないという人がいる。そうかと思うと暴力をしつけとして位置づけている若い親が増えている。体罰という名の暴力をふるう教師にも、こうした発想は共通している。言って聞かないのなら殴って聞かせるしかないではないかというのが彼らの論理だ。これらから推測がつくことは、暴力はイノセンスに動機をもっているということである。直面する現実に自分は責任がない、責任があるのは相手の方なのだというように。イノセンスはさらにその本人を直面する現実から置き去りにして行く。いじめの行為者たちはあれはいじめではなく遊びだと弁明した。だが虐待する親、しつけする親、教育する教師は自己の暴力をもっと積極的に相手の非に帰するのである。彼らの言い分はこう集約されよう。自分は積極的に殴ったのではない、相手に殴らされたのだ。ここにおける受け身の論理に留意しておこう。

事例と論理を区別して、すりあわせてみよう。（　）内は、読者としてのツッコミ。

（事例）

①虐待している親

・自分が暴力をふるうつらさを感じる　（ほんなら、なんで虐待すんねん）

・暴力をふるわれている子どもの心の痛みは感じない　（想像力ゼロか）

②しつけする親・体罰する教師も

・暴力はしつけだ　（おまえのことを思って殴っているんだ、て？）

③　①②の論理

・自分が暴力をふるう現実に自分は責任がない（イノセンス）、責任があるのは相手の方だ。

④いじめをする者

・あれは遊びだ→弁明する。現実をごまかす。

⑤虐待する親・教師

・相手が言っても聞かないから、相手のために、暴力をふるった。

・自分は暴力をふるいたくなかったが、相手の態度がそうさせた。→正当化。意義づけ。責任回避。

取り出されているのは、**自分が選んだのではない（から）、自分には責任がない**、という態度だ。

ここで立ち止まっておこう。ここには、二種類のイノセンスが示されている。

①自分の生は自分が選んだものでない（＝根源的受動性）――肯定されるべきもの

②自分が選んで殴ったのではないから、自分には責任がない――否定されるべきもの

③　やさしさと残酷さの二つの感情が重なる場所。その場所こそがイノセンスという心的場所なのである。しつけとか教育という一見、正当さを主張できる動機でもって、暴力がふるわれる。その残酷さに対して暴力をふるう人から、それは子どものためであり、したがってやさしさだと主張されても誰も異議を唱えられない場所がイノセンスという心的場

所なのである。

「それは子どものためであり、したがってやさしさだと主張されても誰も異議を唱えられない場所」が「イノセンスという心的場所」だと筆者はいっている。

しかし、これを読む私たちは、異議を唱えたくなるのではないか。ここは、次のように読むべきだろう。――「誰も異議を唱えられない」としたら、その人たちは、その主張を共有してしまっている、すなわち、そういった主張が是認されてしまう空気が「イノセンスという心的場所」と呼ばれているものだ。

しつけのための体罰、が、共有・是認されてしまったとき、体罰は愛情からおこなわれる効果的な行為だ、あの先生はいい先生だ、という「イノセンスという心的場所」が濃密に、形成される。自閉した「心的場所」は、異議が生まれる可能性を殺してしまう窒息空間となる。そして、悲劇は起きる。これは、家庭内でも同じだ。

④　大平健著『やさしさの精神病理』という本を読んだ。いろいろ触発されるところが多かった。私たちの興味を引いたのは、次のようなエピソードである。電車だかバスだかのなかでお年寄りに席を立とうか立つまいかをめぐって、複雑に自問自答する高校生のことが書かれているのだが、その心の揺れを語った言葉に着目した。ふだんなら坐れないのにたまたまその日は坐れた。そうしたらオジイさんが自分の前に立った。席を譲ってあげようかと思ったけど、最近の年寄りには元気な人が多い。年寄り扱いしたら気を悪くするだろうかなどと考えてたら、立つのをやめたほうがいいという判断になった。結局寝たふりしちゃった。寝たふりしたのは、私たちのやさしさが分からない大人とかが、「この子、席も立たないで。」みたいな目つきでじろじろ見るからだ、と。

わかる気もするよね。ここでの「やさしさ」とは、

・「やさしさ」＝年寄り扱いしないでいてあげること

ここにも、「相手のことを思っている」という論理が含まれている。その結果、その高校生が得られたものは何か？　ずっと座っていること！　客観的には、高校生は座り続け、お年寄りは立ち続ける。しかし、主観的には、高校生は相手へのやさしさと屈託を抱えていた（らしい）。

⑤　年寄り扱いしないのもやさしさだという論理には一定の正当性が認められる。と同時に、年寄りには席を譲るという若い人たちに課されてきたこれまでの日常道徳を脅かすものだ。だが若い人たちの新しいモラルとしてのやさしさはまだ、寝たふりをしなくてはならないくらいにしか市民権を獲得していない。

筆者は「年寄り扱いしないのはやさしさだという論理」を「若い人たちの新しいモラル」

と位置づけている。一方、「足腰が弱くなっている年寄りには席を譲るのがやさしさだ」を旧来の日常道徳としている。――どう違うのか？

⑥　年寄り扱いをしないのがやさしさだという主張には、内部では他人にやさしく、その現れとしては自分にやさしい。しかしその外への現れとしては、知っていながら年寄りを立ったまま放置しておくのと同じであり、それはときに一種の残酷さとして現れる。

「内部では他人にやさしく」＝高校生の心中ではお年寄りにやさしくしているつもり。

「その現れとしては自分にやさしい」＝自分は座ったままだから、自分にやさしい。

「その外への現れ」＝自分は座り、お年寄りを立たせたまま――残酷に見える。

⑥続き　むろん、この残酷さには先にみたイノセンスとしか言いようのない行動や論理から較べ、**読解問題1** 紙一重ではあるが健康さを感じる。寝たふりをするところなど、現実に目をつぶったという点でイノセンスには違いないが、それでも他者との内部の葛藤を経ている点で、紙一重でイノセンスを脱している。

「先にみたイノセンスとしか言いようのない行動や論理」＝相手が悪いから、自分は相手に暴力ふるわされているわけで、自分には何の責任もない。

「寝たふり」＝自分の意図を理解せず、じろじろ見る人たちが悪いから、自分は寝たふりをさせられているわけで、自分には責任はない。

「他者との内部の葛藤を経ている」＝相手のために立つのがやさしさか、立たないのがやさしさか、迷った。

読解問題1「紙一重ではあるが健康さを感じる」とは？

☆傍線部を延長して、いいかえる。お年寄りを立たせたままだったことには、「先にみたイノセンスとしか言いようのない行動や論理から較べ、紙一重ではあるが健康さを感じる」。先の例（虐待・体罰）と比較することが課題だ。

虐待・体罰では、「自分が暴力をふるうつらさを感じる」「暴力をふるわれている子どもの心の痛みは感じない」「暴力はしつけだ」。

〈席を立たない〉では、「自分が立たない葛藤を感じている」「相手が何を望んでいるかを一応考えている」「立たないのは年寄り扱いしてほしくない人のための配慮だと考えている」。

似ているけれど、紙一重、という、その違いはどこか。

「子どもの心の痛みは感じることなく、自分だけがつらいめにあっている」

「相手が何を望んでいるかを考え、立つかどうか、葛藤している」

絶対必要なのは、「相手のことを少しでも想像しているか」だ。

【解答例】（客観的に見ればどちらも相手に残酷なことをしているように見えるが）虐待や体罰の例では、相手の心の痛みを感じることなく行為に及んでいるが、高校生の例では、相手が何を望んでいるかを考え、立つかどうか、葛藤した上で、立たないという行為を選んでいるという点で、自分の行為を反省する可能性が含まれている感じがするということ。

締めくくり方、はいつも問題になるが、原則は、**☆問いに呼応した文末にする**、ことだ。「健康さを感じる」とは？という問いに合うようにするには、「健康」をいいかえなくてはならない。逆に、この文脈での「不健康」とは何か、を考えてみる。するとそれは、先の例にある、まったく他者の顧みないだけでなく、自分のしていることをふりかえる視点ももたない点にある。「俺にも責任があるかもしれない」という反省が死んでしまっているところに、虐待・体罰の病的な心理がうかがえる。だから、その逆。ためらい、ふりかえり、開いている可能性、別の行為を選択する可能性――そういったことばでこの「健康」を表現したい。

⑦　このような心のあり方をだから自己愛などというふうに単純に理解してはならないと思う。単純な自己愛なら退行で片づけられる。だが若い人たちは退行しているのではない。年寄り扱いしないのがやさしさだという彼らの言葉に現れているように、他者への愛を内部で成立させながら、それをはたらきかけとして外へ表さないのだ。自己愛という言葉を使うなら、内部をもった自己愛と言うべきであろう。そしてこの新しいやさしさは一見、他者に対して残酷に見えるやさしさなのである。

さて、ここからが、筆者の主張の始まりだ。ここまで読んで、虐待ひどい、体罰ゆるせない、席譲らないって正当化じゃん、結局、イノセンスってダメじゃんってことだね――その視点だけで〈わかったような気になっていた〉としたら、修正しなければならない。

席譲らない的な「やさしさ」は、「他者への愛を内部で成立させながら、それをはたらきかけとして外へ表さない」やさしさだと筆者はいっている。心の中では、他者への思いやりをもっている、しかし、結局席を立たないから、そのやさしさは、外へは出ない、見えない。むしろ逆に、残酷さ、に見えてしまう。

⑧　さらに興味をひくのは、若い人たちが自分の口から自分の態度をやさしさだと主張している点である。このような主張に出会うと私たちはふたたび彼らのイノセンスを疑う。なぜならば、暴力を遊びとかしつけとか教育というように言い張っている人たちの論理とそっくりだからである。

自分の口から自分の態度（席を譲らない）をやさしさだと主張するのは、自分の暴力はしつけだと口にする虐待親と同じ理屈に見える。

⑨　私たちの経験ではやさしさの評価はこれまで、「あの人はやさしい。」というように他者が下すものであった。だが若い人たちは、自分で自分をやさしいと評する。やさしさは何よりもまず自己評価として必要なのだ。ここでも旧来のあり方が一八〇度転倒していることに気づかされる。この他者性の欠如が、彼らにとってやさしさが彼らのイノセンスの現れであるというようにみえる最大の理由なのだ。だがこうした批判的な見方はことによったら、読解問題2真実の半分を言い当てているだけなのかも知れない。

やさしさの評価（旧）……あの人はやさしい
やさしさの評価（新）……じぶんはやさしい。他者からの評価が欠けている。

⑩　他者を巻き込むことを回避することこそが若い人たちの生み出しつつある新しいモラルつまりやさしさだとすれば、私たちに他者性の欠如として否定的に分析されたものこそが、彼らにとってのモラルであり、したがって価値であるかも知れないのだ。だから若い人たちはそうした態度を自信をもって価値として打ち出しているのではなかろうか。これを価値であるとみなしていいのなら、人類はいままでにまったく知らなかった価値についての感性に出会っていると考えるべきだろう。

読解問題2「真実の半分を言い当てているだけなのかも知れない」とあるが、その理由を説明しなさい。

自分で自分をやさしいと評価するのは、自分の中で閉じている。筆者が提示するのは、しかし、そのこと自体が、新しい価値なのかもしれない、という可能性である。

たしかに、他者というのはやっかいである。他者をそっとしておくやさしさ、が、よいこととしてリアリティをもちつつある、というのはわかる気がしないか。

半分、というのは、同じことが、批判的にも、逆に、価値としても捉えられるということだ。

☆傍線を延ばし、解答の構文を確認してから、綴るといい。

「こうした批判的な見方はことによったら、（　　）という面を言い当てているだけで、（　　）という面を言い当ててないから。」

こういう枠組みを先に用意し、「**（他者性の欠如）**という面を批判しているだけで」「**（新しい価値なのかもしれない）**という面を言い当てていない」などとキーワードを入れれば、答案の原案ができる。そこさえできれば、どうにでも消化できるだろう。違う言い回しの解答例を挙げておく。

【解答例】自分で自分をやさしいと評価するのは、他者からの評価が欠けている点で、批判されるべきあり方に見える。しかし一方、他者を巻き込むことを回避するという新しい価値が生まれつつあるのだと考えれば、批判されるべきものではないから。

⑪　このような新しい価値においては、やさしさは残酷さという形態をとることが起こりうる。それは他者にはたらきかけて生み出した残酷さではなく、逆のはたらきかけないことによる結果としての残酷さである。この新しいやさしさにおいて、他者は内部でくっきりと像を結んでいながら、これまで私たちが馴染んできた他者へと伸びて行き繋がろうとするやさしさとは異なる、あるいは正反対の外においては自他の境界が切断された世界が出現してくる。このやさしさと残酷さの一致は、読解問題３やがて若い人たちにとっても自身で引き受けざるをえない苛酷な価値になっていくにちがいない。

ちょっとむずかしくなってきた。そんなときは、ていねいに**☆指示内容を補填しつつ読む**。やってみよう。

他者を巻き込むことを回避するという新しい価値においては、やさしさは残酷さという形態をとる。やさしさから生まれる残酷さとは他者にはたらきかけて生み出した残酷さではなく、逆の、はたらきかけないことによって生まれる残酷さである。この、他者に働きかけないというやさしさでも、他者は内部でくっきりと像を結んでいる。しかし、他者に働きかけないやさしさは、他者と繋がろうとするやさしさとは正反対だ。（内部には他者の像はあるが）外においては、自他の境界が切断された世界が出現してくる。このやさしさと残酷さの一致は、やがて若い人たちにとっても（そのやさしさと残酷さの一致を）自身で引き受けざるをえない苛酷な価値になっていく。

「自他の境界が切断された世界」とはなんだろう。⑫⑬に例があるように、それは、自分と他者が、ぷつんと切り離されている世界だ。では、「他者に働きかけない」ことがどのように残酷さにつながるのか。抽象的なまま考えても、理解しにくいかもしれない。そんなときは、**☆例で考える**。座席を譲らない例で考えるなら、内面でやさしさを感じている高校生は、高齢者に席を譲らない（働きかけない）という、足の弱い老人にとっての残酷さを発揮した、ということだ。自分にとってのやさしさは、他者にとっての残酷さになる。この、他者に働きかけるなんてことしないほうがいいよ、というのが、（広く広がる）一つの価値になったとしたら、もはや、自分が（その高校生が）足をけがしたとしても、誰にも席を譲ってもらえない、ということを意味する。

読解問題３　「やがて若い人たちにとっても自身で引き受けざるをえない苛酷な価値になっていく」とは？

もはや、自分が（その高校生が）足をけがしたとしても、誰にも席を譲ってもらえない、という、今、例で考えた部分を生かす。

【解答例】他者に働きかけないやさしさは、他者にとって残酷なものとなるが、やがてそのやさしさが広がったなら、自分もまた誰からも働きかけてもらえないという残酷さを味わわねばならないことになる、ということ。

⑫　ここをやや硬質な言葉を用いて言ってみたい。たぶん、こうした事態はこれまで通用していた他者との「距離のエロス」が崩壊したことと関係がある。距離のエロスの崩壊という観点を具体的なシーンとして説明してみよう。たとえば直接に顔を合わせて語り合うより間接的な電話での方がずっと親密感を覚え長時間の会話が可能であるといった若い人たちの生態、また外から内部が見える透明なガラス張りの喫茶店が登場し若い人で賑わうといった現象、さらには何人か一緒に喫茶店に出かけて行きながら各自が漫画雑誌に読み耽るといった光景ということになろう。さらにコンビニエンスストアの愛好を加えることができる。これらはどれもここ二十年ばかりのあいだに生じてきて私たちの関心を引いた都市の若い人たちの生態である。

たしかに、これらには、自分はここにいるが、他者への働きかけや、他者からの働きかけは関係ない、という、自他の切り離しがある。コンビニで「何をお探しですか」とか迫られたらウザい。個が漂う空間の心地よさ。

⑬　ここに現れてきているのは、エロスすなわち親密さが、他者との距離を詰めるところに現れる濃厚さではなく、距離を保つことで成立する希薄さによって保障されているといった事態である。この距離のエロスの崩壊は逆転と言ってもいい。こうした状況は時代的なものとみなすことができる。若い人たちの「やさしさ」という価値は、旧来の価値意識と鋭く対立するゆえに病理に見える。だがそのように言うとき、同時にそれは時代があるいは時代精神が新しい価値の場所に入ろうとする境界のありようを示しているのではないだろうか。

傍線部の構文は、「エロスすなわち親密さが、……希薄さによって保障されている」である。心地よい感じ、親しい感じ、は、べたべた距離を詰めることではなく、うすーくつながっているところに生まれるようになっている。筆者は、これを「時代」のせいだといっている。

これまでの「しっかりつながるのが安心で心地いい」という価値観から見れば、個が漂

っている世界は、おかしなものに見える。この「おかしなものに感じる」部分と「心地いい」と感じる部分の境目が、時代の境目なのだ、と筆者は言っている。

■**読解問題**

1　「紙一重ではあるが健康さを感じる」とは、どのようなことか。

2　「真実の半分を言い当てているだけなのかも知れない」とあるが、その理由を説明しなさい。

3　「やがて若い人たちにとっても自身で引き受けざるをえない苛酷な価値になっていく」とは、どのようなことか。

■**発展問題**　筆者は「新しいやさしさ」にある種の可能性を見ようとしているが、どう考えるか。「新しいやさしさ」がよいものに進化する条件、そうではない条件を想定し、論じなさい。

●重要語「イノセンス」　本文の説明から理解しておこう。ここでは否定的な意味合いで使われていたが、根源的に私たちは、受動的な存在であるという認識自体は真実である。